

第5章

地域振興の制度構築における住民主体の意義

——マレーシア・サバ州ティナンゴール村のロングハウス農村観光の事例——

宗 像 朗

はじめに

本章では、急速な経済成長を遂げているマレーシアの観光産業、特にエコツーリズム振興という文脈のなかで、地域住民の主体性と裁量で実現されたマレーシア・サバ州の農村観光の事例を紹介する。マレーシア・サバ州の平均的な農村であるティナンゴール村およびその分村ババンガゾ村では、観光産業の振興、一村一品事業といった上からの地域振興策を住民が巧みに利用して、伝統的なロングハウス（高床式の長屋）という地域資源にもとづいた農村観光事業が展開されている（図1）¹⁾。筆者は1987年から1990年まで青年海外協力隊としてティナンゴール村に居住し村人とともに農村開発プロジェクトを行い、その後も何度か村を訪問してその変遷をみてきている。この経験も踏まえて、ロングハウスを活用した農村観光事業のこれまでの経緯、利用された地域資源、関連する村内外のアクター、政府を含む外部との繋がり、村人や地域への影響、村落というインフラ環境のもとでのサービス提供や顧客確保などについて村人の対応を中心に考える。また、この一事例から抽出される地域振興の制度構築への含意について住民主体とは何かを中心に考察する。

図1 調査村略図



(出所) 筆者作成。

第1節 事例の背景

マレーシアは、過去20年間の平均 GDP 成長率約 6% を達成し、1 人あたり GDP も 5000 ドルを超え 2020 年までに「先進国入りを実現する」という国家目標が現実味を帯びて聞こえるまでの経済成長を遂げている。この経済成長の背景としては、日本とほぼ同じ広さの国土に 2600 万人程度の人口であること、森林や錫、石油、天然ガスなどの天然資源に恵まれていること、英領時代に基礎が築かれた天然ゴムや油椰子などのプランテーションの継続的な振興に成功したこと、また積極的に外資を受け入れ、輸出工業化に成功したことなどが挙げられる。

マレーシアの観光産業は、2005 年の外国観光客の受入数約 1600 万人で日本の 3 倍、中国、香港に次いでアジア地域で第 3 位の地位を占めている。観光の対 GNP 比は約 5% に上り、観光産業が石油・ガスに次ぐ外貨獲得部門になっている。1990 年前後からは開発政策においても観光産業の重要性が明確

に意識され、1991年には「マレーシア観光政策」(Malaysia Tourism Policy)が作成された。2006年から始まった第9次国家開発計画では、マレーシア経済を労働集約型から知識基盤経済に移行し、経済の高付加価値化、地域格差是正の実現を目指すとして、観光開発はその重要な戦略産業のひとつに位置付けられている。このような観光産業の急進のなか、マレーシアのエコツーリズムも順調な成長を遂げ観光収入全体の約10%程度を占めるまでに至っている。自然資源を中心とする地域資源を活用したエコツーリズムは、潜在力が高く持続可能な観光開発の方向として打ち出され、1996年には「国家エコツーリズム計画」(National Ecotourism Plan)が文化芸術観光省の指導のもとで作成された。この計画のなかで、エコツーリズムは「自然環境保全に責任を果たしながらそれを享受し、負の影響を低く抑え、地元住民に利益をもたらすような観光・訪問のあり方」と定義されている。また、マレーシアのエコツーリズムを振興するうえで検討されるべき課題として、受容能力と受け入れ可能な変化、エコシステム・生態系、ゾーニング、地域社会、住民参加、マーケティング、観光客の役割と責任、健康と安全、モニタリング、保全計画などが挙げられ、国家エコツーリズム計画は、連邦・州政府がエコツーリズムの振興支援を行うための包括的なガイドラインとしての役割を果たしている。

本章で取り上げるサバ州は、ボルネオ島の北部に位置し、北海道程度の面積に約260万人の人々が暮らしている。サバ州の人口構成は、カダザン・ドゥスンを中心とする在来民族が約140万人と州人口の過半数を占め、イスラーム教マレー人と中国系、インド系からなるマレーシア半島部とは異なった意味で複雑な多民族構成となっている。いまだに油椰子、石油、木材製品に州の輸出総額の7割を頼り、労働人口の約5割が農林水産業に従事するサバ州は、工業化を中心に経済成長著しいマレーシアのなかで最貧困州のひとつに位置付けられている。インフラ整備でマレーシア半島部に大きく遅れをとり産業集積がほとんど進んでないサバ州においては、東南アジア最高峰のキナバル山やシパダン島などのバイキングスポットを中心にした観光、特にエ

コツーリズムがきわめて重要な戦略産業と考えられている。これは、サバ州が同じくボルネオ島に位置するサラワク州に続いてマレーシア13州中2番目に州観光マスタープラン（Sabah Tourism Master Plan, 1995）を作成していることからもうかがえる。

以下では、前述したようなマレーシアの経済成長、観光産業の急進、エコツーリズムの導入と時を同じくして展開されたサバ州の一村落における住民主体の農村観光の事例を紹介する。必ずしも普遍的な事例とはいえないが、ある程度の年月にわたってみてきた関係する人々の思惑を含めた農村観光の展開を考察し、そこから若干の政策的な含意を見出せればと考えている。

第2節 ティナンゴール村におけるロングハウスによる農村観光事業の端緒

ティナンゴール村およびババンガゾ村のロングハウスによる農村観光事業は（図2）、1992年にティナンゴール村の中心から5キロメートル程度離れたババンガゾ村に移住用の伝統的なロングハウスを建設したことから始まった。当時、ババンガゾ村は実体がなく、帰属する村人もすべてティナンゴール村内に居住していた。2007年現在でもババンガゾ村に本拠を構えている住民は数軒程度で、ロングハウス農村観光事業に関わる村人も含め多くの村人はティナンゴール村に住み、そこからババンガゾ村に通っている。

1992年当時、ババンガゾ村が伝統的なロングハウスを自ら建設した背景には、ババンガゾ村周辺・グマントン山地域でのゴムの植付け開始にともなって、その作業小屋が必要になったことが挙げられる。また、1990年頃にはサバの州都コタキナバルの州立博物館でルングスを含むサバ州諸民族の伝統的な住居を建設、展示する事業が始められ、ティナンゴール村住民の何人かがこのロングハウス建設事業に参加したことも関係している。この後、1992年にはマレーシアの首都クアラルンプールでも「マレーシア観光年」を記念し

図2 ババンガゾ村のロングハウス



(出所) 筆者撮影。

たマレーシア諸民族の住居展が開催され、ババンガゾの村人3名がサバ観光公社の依頼を受けてルングスの伝統的なロングハウスの建設に参加した。このとき、クアラルンプールに出かけた3名(MJ氏とAK氏の兄弟、およびJ氏)が、その後の伝統的なロングハウスによる農村観光プロジェクトの中心人物になる。また、それより少し前にはサバ観光省、博物館、サバ開発研究所が合同でクダット地域の観光開発調査を行っており、ティナンゴール村でも何度か聞き取り調査が行われた。この結果は「クダットおよび内陸部の観光資源調査」(Touristic Assets in the Kudat and Interior Region)にまとめられ、この地域で最も見込みがある観光資源としてルングスの民族文化が挙げられた。ただし、この段階では伝統的なロングハウスの再建による農村観光の振興は構想されていなかった。このようにティナンゴール村、ババンガゾ村の農村観光は、マレーシア連邦政府、サバ州政府のマクロレベルの観光振興政策に刺激を受けた村人が、自ら始めた事業と位置付けることができる。

この後、ティナンゴール村、ババンガゾ村の伝統的なロングハウスによる農村観光プロジェクトは村の4つのグループによって展開されることになるが、その前に村の成立ちと1990年頃の状況について若干説明する。

ティナンゴール村は、サバ州の州都コタキナバルの北東、約150キロメー

トルに位置する。以前はサバ州の北端にあるクダット郡に含まれていたが、1995年にはマトンゴン準郡庁が村から数キロメートル先に建設され、現在はマトンゴン郡に属する村である⁽²⁾。村の長老の話によると、ティナンゴール村は1930年頃に現在の場所に定着し、村を作ったとのことである。その後、約7年ごとにニッパ椰子の葉で屋根を葺き、森の材木と竹で柱、床、壁を組んだ高床式の長屋（伝統的なロングハウス）の建設をくり返して独立村としての一体性を高めていった。1970年代には時の政権与党であるブルジャヤ党の支援を得て1棟25軒約100メートルからなる3棟のロングハウスがコの字型に建てられ、これを中心にその周りに焼畑用地が広がる現在の村のかたちも確定した。このロングハウスは、農村観光に使われている伝統的なロングハウスではなく、トタン屋根葺きで普通の建材を使った定住型のロングハウスである。

ティナンゴール村の開発は、1950年代から1960年代にかけてクダット郡のルングスへの布教活動を行ったバーセル布教団に大きな影響を受けた⁽³⁾。住民はサバ州最大の先住民であるカダザン・ドゥッソンの一派であるルングスで⁽⁴⁾、現在ではそのほとんどがサバプロテスタント教会に属するキリスト教徒である。1960年頃に村への布教が始められ、1962年には最初の村人がアニミズム的な民族宗教⁽⁵⁾からキリスト教徒に改宗した。布教団は、その年にティナンゴール村から土地を得て、現在のババンガゾ地域に聖書兼農業学校を建設し、ここを中心に布教と農業指導を同時に行った。1965年には小学校、1966年にはクリニックと家政学校がティナンゴール村近くに建設され、村の開発基盤が整備されるとともに、同村はこの地域の布教の中心地になっていった。最近まで村人の唯一の現金収入源であった椰子の植付けもこの布教団によって導入されたものである。このように村のさまざまなインフラや開発の基盤は、この時期に欧米からの布教団によってなされたといえる⁽⁶⁾。

バーセル布教団は1972年にイスラーム教政権が外国人による布教を禁止したためサバを離れ、すべての事業は外国人の布教団員からルングスを含むサバの現地人に受け継がれた。しかし、ティナンゴール村および周辺のルング

スの村はその頃までにはほとんどキリスト教に改宗しており、現在でもこの地域のルングスのほとんどはキリスト教徒で村の中心には教会が建てられている場合が多い。ブルジャヤ党からサバ統一党に政権が替わった⁽⁷⁾1985年から1992年までティナンゴール村では青年海外協力隊の総合農村開発プロジェクトが実施され、累積10名の協力隊員が村に住み込んで、さまざまな分野の生計向上事業を行った⁽⁸⁾。次に筆者がこのプロジェクトの協力隊員として村で活動し、村人がロングハウスによる農村観光事業を始めようとしていた1990年頃の村の様子について概説する。

1990年頃のティナンゴール村（現在のババンガゾ村を含む）は、約90世帯、人口600人からなり、村の共有地には3棟のロングハウスと十数軒の独立家屋があった。村人の生業は、乾季に山を焼き、雨季に稲ととうもろこしを植え付ける年一作の焼き畑農業であった。電気はなく煮炊きは薪、生活用水は川とグマントン山からの簡易水道に頼っていたが、乾季にはこの水道も使えなくなることがたびたびであった。前述のようにキリスト教布教団が作った小学校、クリニック、家庭学校、聖書兼農業学校が村の近くにあり、州都クタキナバルからの国道にも近く、インフラ条件の面では周辺のルングスの村よりは恵まれていた。しかし、村の生活ははまだ非常に伝統的なもので、現金収入は椰子の販売収入のみで村には椰子を運ぶトラックが2台、家族内に職を持つ人がいる世帯は6軒のみであった⁽⁹⁾。その頃の村人の生活水準を一言で表現するのは難しいが、焼畑が主で現金収入がほとんどないなか、多くの子供達に食事と教育⁽¹⁰⁾を与えることは多くの村人にとって非常に困難であったようである。2007年の聞き取り調査では、ほとんどの村人が当手を振り返って「食べるものや現金がほとんどなく本当に苦しかった」と回答している。傍でみても、やっと焼畑地から収穫したわずかな米を町の中国人商人に売って子供の学費を払い、自分達はとうもろこしを食べる村人の生活は本当に厳しいものだったことを覚えている。

ババンガゾ村がティナンゴール村から分離して新しい村として登記されたのも、青年海外協力隊プロジェクトが行われていた1986年前後のことである。

ババンガゾ村の領域は前述のパーセル布教団が建設した聖書兼農業学校の近くで、ティナンゴール村の水源林であるグマントン山の裾野の地域である。ババンガゾ村の分村、独立の動きはティナンゴール村内のブルジャヤ党派とサバ統一党派の対立と、それにともなって政府の公共事業の受け皿組織を2つにしたいという村人の思惑から始まった。この時期、村は政治的に混乱していて、村人は自分がどちらの村に登録されているのかすら把握していない状況だった。したがって、当初はババンガゾ村に属する村人も実際にティナンゴール村から新村に住居を移す意向はほとんど持っていなかった。しかし、1990年頃にサバ州ゴム基金がグマントン山麓のババンガゾ村にゴム園を開くという計画が持ち上がり状況が一変した。同村に土地を持つ村人11名（後の農村観光の中心人物）はこの計画に関心を持ち、ゴム園開設の作業小屋を兼ねた住居を建設して、名実ともにババンガゾ村を独立した村にしようと考えた。ただし、その動機の奥には実体のある新村建設を州政府にアピールすることで、これに関連する公共事業を導入しようという思惑もあったものと思われる。いずれにせよ、このゴム園を始めるための作業小屋、ババンガゾ村建設の動きと前述のクアラランプール、クタキナバルでの民族村建設への関わりのなかから村人は単なる作業小屋の建設ではなく、伝統的なロングハウスを新村に建設することを思い立ち実行に移した。これがババンガゾ村、ティナンゴール村の伝統的なロングハウスによる農村観光事業開始の契機である。この伝統的なロングハウスによる農村観光の開始時期は青年海外協力隊プロジェクトの終了時に重なるわけだが、村にいた隊員が何度か相談を受けた程度で青年海外協力隊プロジェクトはこの事業にまったく関与していない。

第3節 4つのロングハウスによる農村観光プロジェクトの展開

前述のようにティナンゴール村、ババンガゾ村のロングハウスによる農村観光事業は、1992年のババンガゾ村の新村、ゴム園の作業小屋建設から始ま

った。これがババングゾ・ルングス・ロングハウスの前身で、ルングス社会の伝統的なロングハウスを使った最初の農村観光事業である(図3)。1995年にはババングゾ村に刺激されティナンゴール村にもう1棟伝統的なロングハウスが建てられ農村観光が試みられたが、短期間で失敗に終わった。その後、2001年にはババングゾ村のロングハウス事業の関係者の間で仲間割れが起き、中心人物のひとりであったMJ氏がババングゾ村のロングハウスのすぐ近くに新たなロングハウスを建設してマランジャック・ホームステイを開始した。また、2003年にはティナンゴール村の開発委員長であるMB氏が州都コタキナバルのNGOであるPACOS⁽¹⁾の支援を得てロングハウスを建設した。したがって、ティナンゴール村とババングゾ村ではこれまで4つのロングハウスによる農村観光事業が行われ、2007年の時点ではそのうち3つの事業が継続されている。以下ではそれぞれの事業の概要と展開について説明する。

1. ババングゾ・ルングス・ロングハウス (Bavanggazo Rungus Longhouse)

前述のようにババングゾ・ルングス・ロングハウス(以下BRL)は、1992年にババングゾ村の11家族で開始された。当初の目的はティナンゴール村から名実ともに独立し、ゴム園の作業実施のための住居を確保することだった。2007年現在でもババングゾの村人の多くはティナンゴール村内に居を構えているが、観光用ロングハウス周辺の約40エーカーのゴム園はババングゾ村の村人の主な収入源になりつつある。前述のように1992年にクアラルンプールでマレーシア観光年関連で民族村展示があり、これに参加しルングスの伝統的なロングハウスを建設した村人3名がこの経験を他の村人と協議して農村観光も視野に入れて伝統的なかたちでロングハウスを建設することになった。1992年のロングハウス建設はすべて村人による資材提供と無償労働によって行われた。一方で村人はロングハウス建設後に政府の支援を要請し、サバ観光公社からトイレの設置費用として約10万円(2400リングギット)⁽²⁾、州議会議

図3 一村一品事業支援で国道に設置されたルングス・ロングハウスのサインボード



(出所) 筆者撮影。

員から水道設置に対する若干の支援を得ている。ロングハウスが建てられている土地はババングゾ村の共有地である。

その後、1995年には農村開発省の一村一品事業¹³から支援を得て第1棟の建替え（第2棟建設）を行い、1998年には農業省から養魚池建設の名目で支援を得て第3棟を建設した。しかし、第3棟は完成から2週間後に起きた山火事で消失した。2007年4月にはマネージャーのAK氏が、個人的に資金を出し11部屋の新しいロングハウスを建設した。建設費用は約100万円で屋根、壁、床の材料は近隣村から柱は村内から調達し政府の支援はなかった。

BRLは開始当初からMJ氏とAK氏の兄弟が中心になって運営していたが、2000年に兄弟の間で争いが起こり、以降、弟のAK氏が中心となってババングゾ村のロングハウス農村観光事業を進めていくようになった。2007年現在、12家族が主に事業を行っている。しかし、現在の事業には1992年のプロジェクト開始当時のメンバーはAK氏以外関わっておらず、中心となっているのはほとんどが彼の妻の親族である。現在使用されている一番新しいロングハ

ウス第4棟の建設費用をほぼすべて彼が負担したこともあり、現在は彼がロングハウス事業の収支をすべて管理し、メンバーに歩合制の給与を支払うかたちになっている。これについてメンバーは「損をしたらAKがかぶることになるので仕方ない」と考えている。一方で、AK氏と妻がすべてを握っていて、このようなかたちはコミュニティビジネスでないと批判する村人もいる。

現在の事業の管理体制は、マネージャーであるAK氏が収入と支出、労務管理、観光業者との折衝などすべてを行うかたちが取られている。メンバーは週1回の清掃（無償）と観光客への踊り披露（約200円/回）を行い、歩合で給与を受け取る。AK氏はサバ観光公社の支援を得て民族文化の観光資源化が進んでいるサラワク州のロングハウス観光の視察に出かけるなどして、ビジネスとしての農村観光マネジメントのノウハウを身に付けつつある。ロングハウスの脇には彼の家族が経営する手工芸品の販売所も併設されていて、BRLのメンバーを中心とするババンガゾ村の村人が作った手工芸品が販売されている。手工芸品はコタキナバルやクアラルンプールでも販売されていて、何人かは手工芸品の展示販売のためクアラルンプールやシンガポールなどに出かけたこともある。AK氏は、州議会議員、農村開発局の一村一品事業またはサバ観光省・観光公社の財政支援を得て新しいロングハウスを増設したいとの意向を持っている。

BRLの最も多い宿泊のパターンは、夕方に州都コタキナバルの観光業者がミニバスで観光客を連れてきて、7時に夕食、8時から1時間位のパフォーマンス、ロングハウス宿泊、翌朝発というものである。パフォーマンスは、バンブーダンス、ルングスギター、鼻笛、伝統的な踊り（モギゴール）などで、演者は事業のメンバーおよび家族が行う。料金は2食付で外国人が75リングット（約3000円）、マレーシア人が50リングット（約2000円）、学生は30リングット（約1000円）で現金で受け取る。宿泊客は、平均すると約7割が外国人、3割が中国系を中心とするマレーシア人で、月の売上げは平均すると10万円程度である。観光客の多くはコタキナバルの観光業者が確保し、電

話またはファックスで人数や到着日時などについて村に連絡される。業者はBRL側からの確認の連絡を待って観光客を連れてくることになっているが、実際には村側と連絡が取れない場合も多く見切り発車でコタキナバルを出ることが多い。観光業者によると、万が一BRLでの宿泊ができない場合でも後述するマランジャック・ホームステイなどのほかのロングハウス宿泊施設があるので、このようなアレンジが可能であるとのことであった。BRLが付き合いのある観光業者は約60社で3月から10月は観光客が多く、11月から2月は少ない。

2005年からBRLの農村観光事業に参加している44歳の職のない農民がこのプロジェクトから得る平均的な月収は、本人のロングハウスでの踊りから3000円、妻が作る手工芸品の売上げが6000円、ババンガゾ村のゴム園での労働から6000円で合計1万5000円程度になる。彼の家族は米などの食料はほぼ自給できているが、子供3人の教科書や寮費などの教育費がかさみ、ぎりぎりの暮らしとのことである。数年後には自分のゴム園からの収穫が始まり、収入が安定するものと期待している。

2. マランジャック・ホームステイ (Maranjak Homestay)

マランジャック・ホームステイは2001年に建設され、前述のババンガゾ・ルングス・ロングハウス (BRL) から分かれたMJ氏が中心になって事業が開始された (図4)。2007年現在12家族がこの事業に参加している。ロングハウスの建設費用は参加家族が均等に負担し、建設作業は自分達で行った。ただし、事後的に州政府や州議会議員から多少の支援を得ているようである。ロングハウスは11部屋のほか、ルングス社会の伝統儀式のための施設ロリザン (槽)、パマパカン (祈りの場所)、ボボアダット (罪人の収容籠) などが設置・展示されている¹⁴⁾。筆者が村にいた1990年当時は、キリスト教の影響でこれらはルングス社会の未開の象徴のように扱われていたが、2007年には観光客の関心を引く目的もあり復活していた。これは伝統文化が観光客に好意

図4 マランジャック・ホームステイ



(出所) 筆者撮影。右手前は受付。

的に捉えられることによる自信回復の一例であると思われる。マランジャック・ホームステイでは、農村観光の宣伝を兼ねてロングハウス、ルングス文化に関する紹介ビデオCDも制作している(図5)。

ロングハウスは周辺の森を含め6エーカー程度のMJ氏の私有地にある。これまでの実績、私有地にあることを考えても彼が事業の中心であることは間違いない。しかし、MJ氏本人は村全体の事業であり少しでも多くの村人に職を与えるのがこの事業の目的であると強調していた。ほかのメンバーも現在の彼の運営におおむね満足しているようである。

BRL同様、パフォーマンスはバンブーダンス、ルングスギター、鼻笛、伝統的な踊り(モギゴール)などがメンバーの家族によって行われる。モギゴールの基本的な構成は男1名、女4名、伴奏5名の10名である。このほか、手工芸作り実演、ジャングルトレッキングもある。マランジャック・ホームステイは自前の観光案内パンフレットを作成して、州都コタキナバルのサバ観光公社案内所に置くなど独自ルートでの観光客獲得を心がけている。

観光客の構成は、コタキナバルの観光業者を通じた外国からのパッケージ客が6割、フリーの客が4割で、宿泊6割、日帰り4割程度である。外国か

図5 マランジャック・ホームステイが製作したルングス文化紹介 CD のカバー



(出所) 関係者の許可を得て掲載。

らの観光客の内訳は7割が西欧人、2割が中国系（シンガポール、中国系マレーシア人、台湾など）、日本人、韓国人ほかが1割程度である。平均すると月に約40泊の宿泊客を得ていて、宿泊料金は3000円なので平均的な月の売上げはBRLとほぼ同額の10万円程度である。宿泊しない見学訪問のみの場合、大人100円の見学料を取っている。マランジャック・ホームステイの帳簿から作成した過去1年間の売上げは表1の通りである。

メンバー間の基本的な労賃と利益分配も基本的にBRLと変わらない。踊り手とドラ伴奏は1回200円（5リンギット）、子供達によるバンブーダンスは1回100円である。宿泊客には300円程度のおみやげと椰子ジュースが振舞われ、これらと食事代が必要経費になる。なお、地主でマネージャーでもあるMJ氏は利益の4%を受け取っている。利益から前述した経費を差し引き残りを貯蓄し、年末に再度メンバーへのボーナス支給を行い、その残りを将来への基金として預金している。2006年末までにこの基金は数千リンギットに達しているとのことであった。

表1 マランジャック・ホームステイの過去1年の実績
(単位:リンギット)

年・月	宿泊数	売上げ	経費 ¹⁾	利益 ²⁾
2006年6月	41	3,324	982	2,343
2006年7月	40	3,086	944	2,142
2006年8月	44	4,085	1,136	2,949
2006年9月	46	3,450	690	2,760
2006年10月	17	1,310	255	1,055
2006年11月	16	1,186	670	516
2006年12月	22	1,630	898	732
2007年1月	43	3,731	681	3,050
2007年2月	33	2,510	439	2,071
2007年3月	94	5,405	1,535	3,870
2007年4月	31	4,995	1,350	3,645
2007年5月	43	2,585	622	1,962
合計	470	37,297	10,202	27,095
平均	39	3,108	850	2,258

(出所) マランジャック・ホームステイの帳簿から筆者作成。

(注) 1) 食事の材料, 清掃, 備品購入, 修繕費など。

2) 利益からメンバーによる踊りなどの賃金を支払う。

2007年1月21日から5月26日の訪問者リスト(見学のみを含む449名)の内訳は、マレーシア国内340、欧米72、東アジア26、アセアン7、そのほか4である。2006年7月から2007年3月の宿泊観光客(全体で324)の紹介業者別の内訳は、観光業者193、フリーの外国人観光客29、サバ大学の学生40、メンバーの知人の経由35、教会関係16、そのほか11であった。これまでのところ、マランジャック・ホームステイもBRL同様に集客に関して大きく観光業者に依存していることがうかがえる。一方、メンバーの知合いを半島マレーシアから招くなどして独自に観光客を確保するルートを開拓するとともに、マレーシア大学サバ分校の学生を環境教育の一環として安く受け入れるなどの工夫を始めている。

3. ティナンゴール・ロングハウス (Tinangol Longhouse)

ティナンゴール村の農村観光事業は、村落開発委員長の MB 氏がコタキナバルの NGO である PACOS の支援を得てコミュニティ事業として2003年に開始した。ロングハウス建設は、PACOS から資材費など約20万円の支援を得てティナンゴール村から40名が参加した共同作業で行われたが、2007年5月現在までこの事業に関わっているのは12家族のみである。MB 氏によると、参加家族が減ったのは排除したからではなく、観光客が少なく売上げが少なく多くの村人がこの事業に関心を失ったためとのことである。なお、現在のメンバーは、UNDP/PACOS の支援を受けて実施されている「グマントン水源林保全プロジェクト」¹⁹⁾を実施するティナンゴール村 NGO のメンバーとほぼ一致する。

農村観光のために MB 氏の私有地に建てられたロングハウス周辺には、UNDP/PACOS の水源林保全プロジェクトの一環として植林や伝統的な薬草、薬木の植付けが行われている。そこでのサービスは BRL、マランジャック・ホームステイと基本的に変わらないが、このロングハウスには池が併設されていて釣りなどができる。池のなかにルングスの伝統的な焼畑休息所(スラップ)に模した出島の休息所が併設されている。一方、電気がなく国道に近く少し車の音が聞こえるなどの弱点がある。このため料金は食事を含まずに1泊500円とほかよりかなり安い。最近の宿泊実績は、2006年8月から2007年3月までの8カ月で39泊と、前述の2事業と比べて著しく低い。月5泊、3000円程度の売上げであり、事業参加者で均等に分けたとすれば月300円以下である。この宿泊客のほとんどがワークショップや環境教育セミナー参加者など PACOS 関係である。PACOS のワークショップは周辺の村人を招いて1日で行われることが多く、泊まりでないロングハウス利用も多少ある。観光業者とはほとんどコネがなく、今のところ、観光客を確保できていない。このように、ティナンゴール村のロングハウス観光事業ははかばか

しい実績を挙げているとはいえない。

4. 1995年に建設されたティナンゴールのロングハウス

ティナンゴール村の手工芸品をコタキナバルに卸す仕事をしている夫婦が1995年に私有地内に伝統的なロングハウス（13部屋）を建設したのがこの事業の始まりである。この頃には1992年に始められたババンガゾ村のBRL事業が軌道に乗りはじめ、この成功をみたティナンゴール村の12家族が委員会を結成して、この事業を開始した。このときもロングハウスの建設は参加した村人の共同作業で行われたが、事後に州議会議員から若干の財政支援を得たようである。1995年10月にはこの地域で皆既日食があり、これを目指した観光客がクダット地区を多数訪れることとなった。このため、サバ観光公社はこのロングハウス事業にも水タンク、トイレ設置支援を行って1995年9月に営業を始められるよう図った。1995年の皆既日食の日には13部屋が満杯になったが、それ以降ほとんど観光客が訪れず、年末にはそれまでの売上げをメンバーで分配し、この事業は終わった。その後、ティナンゴール村のコミュニティ開発事業として再興が図られたこともあったが、結局うまくいかなかった。

この事業に参加していた村人によれば、サバ観光公社がババンガゾ村のロングハウス農村観光のみを支援したため、観光客を誘致する方法がわからず事業が崩壊したとのことである。ロングハウスは今でも骨格が残っているが、ニッパ椰子の屋根には大穴が開いて宿泊できる状態ではなくなっている。ロングハウスが建設されている土地の所有者は闘鶏が趣味で、ロングハウスによる農村観光事業の失敗後には、たびたびこのロングハウスで闘鶏大会を開催していた。しかし、闘鶏を禁止する警察の知るところとなり、2007年5月に闘鶏大会の実施中に警察に踏み込まれ、闘鶏場は壊され関係者は罰金の処分を受けた。

第4節 ロングハウスを使った農村観光事業の影響

村人主導で始まったティナンゴール村、ババンガゾ村の伝統的なロングハウスによる農村観光事業は、それに直接関わる村人、直接事業には関わらない村人、周辺のルングス社会などに多少とも影響を与えている。本節ではその影響を経済的な側面、社会的な側面、文化的な側面などに分けて考察する。

1. 経済的な影響

それぞれ月に約10万円の売上げがあるババンガゾ・ルングス・ロングハウス(BRL)、マランジャック・ホームステイは村の経済に貢献している。特に2つの事業に直接関わる24家族は、事業から月約1万円の固定収入を得ており、事業は関係する家族の家計の安定に貢献している。約110世帯の村で24家族がこの事業から何らかの固定収入を得ていることになり、村全体にも経済的なメリットがもたらされている。この額は手工芸品の売上げを含んでおらず、これを考慮すれば経済的な効果はさらに大きいものと思われる。マランジャック・ホームステイの訪問者記録をみると、2007年の1月から5月の5カ月の間に約500名(宿泊しなかった人を含む)、月平均100名の訪問客があったことがわかる。訪問客1人平均500円(15リングット)の手工芸品を買ったと仮定すると、月に5万円の売上げになる。BRLにも同様の仮定が当てはまるとすれば、ロングハウス事業関連の手工芸品の売上げは、2つのロングハウス事業の合計で月10万円程度になる。観光客確保のため頻繁にコタキナバルを訪れているMJ氏、AK氏は、近くの漁村でロブスターを購入してコタキナバルのレストランに卸したり、コタキナバルから資材を仕入れて近隣の村に配送したりしている。ロブスター以外はいまだ計画された事業にはなっていないが、このような活動も村に経済的な便益をもたらしている。以上を勘案すると現在まで継続して行われている2つのロングハウスによる

農村観光事業は、村に一定の経済的なインパクトを与えているものといえる。

2. 社会的な影響

ロングハウスによる農村観光事業により、観光公社や観光業者をはじめとする村外の組織とより頻繁に接触するようになり、村人の視野が広がってきている。ただし、渉外はMJ氏、AK氏がほとんど独占的に行っていて、今のところ、この面でのほかのメンバーへのインパクトは小さい。一方、ロングハウス農村観光事業に対する観光公社、農村開発省（一村一品事業）、州議会議員、郡庁などから支援はかなり恣意的に行われ、何の名目でいくら支援があったのかなどについて情報が行きわたっておらず村人の間に相互不信を生んでいる。この面では政策の改善が必要と思われる。また、BRL（AK氏の家族）とマランジャック・ホームステイ（ババンガゾ村の事業の最初のメンバー）の分裂、ティナンゴール村のロングハウス農村観光事業の立上げと失敗など、農村観光をめぐる村人間の調整は行われておらず、むしろ競争と対立を生んでいる。当初は村内にさまざまな軋轢を生じたようだが、現在では村人もこの現実を受け入れている。

2007年の現地調査によると、ティナンゴール村の村人はババンガゾ村のロングハウス農村観光が本格化するに従いティナンゴール村に来る観光客が減って手工芸品の売上げが落ちたと感じている。これに対しティナンゴール村の住民は一村一品事業資金を使って建設した手工芸センター（手工芸品作成兼販売所）を再活性化して、観光客が同村にも足を運ぶよう図っている。その一方でコタキナバルへの手工芸品の直販など販路の多様化も進めている。これらの取組みについても政府の一村一品事業やUNDPのグマントン山の水源地保全プロジェクトとの関連を強調して外部からの支援を有効に活用している。

観光公社や郡庁はババンガゾ村、ティナンゴール村の伝統的なロングハウスや手工芸品を中心にしてこの地を「ルングス文化の観光センター」化しよ

うと考えているようであるが、村人の中にはそのような協調の動きはみられない。むしろBRLとマランジャック・ホームステイの競争によりサービスの質の向上などが実現され、個々の事業の持続性確保に結び付いている。この意味では、外部者の政策的な意図と村人の対応は食い違っている。

BRL、マランジャック・ホームステイともに運営の大部分をマネージャーであるAK氏、MJ氏が行い、ほかのメンバーは給与を受け取るようなかたちで収斂しつつある。一方、コミュニティ事業としてマネジメントを確定できなかったティナンゴール村の2つのロングハウス観光事業はこれまでのところ、かんばしい成果を挙げていない。コミュニティ事業としてはより多くの村人による合議的な運営が望ましいと考えられるが、継続的に利益を挙げていくためには能力がある村人に力が集中していくこともやむをえないのではないと思われる。AK氏は「事業を成功させるためには、メンバーの意見を聞いてはやっていけない局面が多く、独断的にやるしかない」と強調していた。MJ氏はより巧妙に自分の利益を確保しつつ、メンバーの合議でことを進めているように感じられる制度を確立している。ほかのメンバーは彼が観光業者からのバックマージンを受け取るなどして、より大きな利益を得ていることはわかっているが、彼なしにはビジネスが成り立たないこと、表面的には平等な合議体制がとられていることなどから、現在の運営方法を受け入れている。全体としてババンガゾ村、ティナンゴール村の村人は、4つのロングハウスによる農村観光事業を経験しあるいは間近にみて、村外との関係、組織運営などのあり方についてより深く学んだようである。

3. 文化的な影響

農村観光事業を通じて、観光客向けの伝統的な踊り、民族楽器、アニミズム施設の復元などロングハウスをはじめとするルングスの民族文化の復活がみられる。村の内外からのルングス伝統衣装への需要も増えていて焼畑をやめ伝統衣装作りに専念する村人も出てきている。マランジャック・ホームス

テイのロングス文化を紹介する CD 製作にみられるようにアニミズムを含めた民族文化を残そうという気運も高まっている。手工芸品については、伝統的なデザインや材料の復活と、新しい作り方や材料の開発の2つの対照的な動きがみられる。村人は自分の手元に置くものについてはオリジナルにこだわっているが、観光客向けにはワニヤトカゲのかたちのビーズ・キーホルダーなど新しいデザインを取り入れて売れるものを作っている。村で開催された手工芸品開発ワークショップでも課題はもっぱら「新しいデザイン」の研究開発だったそうである。

伝統的なロングハウスは、山の木材や蔓、ニッパなどの地域資源を活用して建設されている。UNDP のグマントン山での水源林保全プロジェクトの影響もあり、在来種を保存しようという動きがみられる。ババンガゾ村のロングハウスがグマントン山の麓にありティナンゴール村もそこを唯一の水源としていることもあり、グマントン山の森林保全については両村の村人とも真剣である。UNDP プロジェクトでは周辺他村の住民を含めた森林保全ワークショップをたびたび実施している。ほかに特徴がなく生活の糧であるグ

図6 外国人観光客と村人



(出所) 筆者撮影。

マントンの森林は村人の共通の利益，関心であり，これを売りにしたロングハウス農村観光は村人の自信にも結び付いているようである（図6）。

4. 周辺他村への影響

ババンガゾ村，ティナンゴール村のロングハウス農村観光の成功に刺激され，周辺のロングハウスの村でも同様の事業が始められている。クダット観光の目玉であるボルネオ島北端（Tip of Borneo）の近くのマラン・パラン村では，2005年7月に浜辺に伝統的なロングハウスを建設して，農村観光を始めている。村人の共同作業で建設し，運営は25名からなる村組織が行っている。同ロングハウスはボルネオ北端も望める絶好の場所にあり，ロングハウスの脇には手工芸品店が併設されている。ロングハウスの建設を含め村の開発委員長が中心になって行っている。彼は，ババンガゾ村のAK氏，MJ氏とも知合いでロングハウス農村観光でもアドバイスを得ている。

また，マトンゴン準郡庁近くのパク村にも2006年に村人の有志16家族で建設した10部屋のロングハウスがある。明確な目的があって作ったというよりもティナンゴール村，ババンガゾ村の成功を聞いて漠然と建設したようである。このロングハウスはコタキナバルとクダットを結ぶ国道沿いにあり，ロングハウスの前に農産物を販売所を作る計画がある。国道沿いで宿泊には向かないようだが，ドライブインのようなかたちで観光客を迎え入れることは可能であろう。

ババンガゾ村のロングハウス，ティナンゴール村の手工芸センターには周辺他村の村人も手工芸品を持ち込んでいて，手工芸品の販売を通じて農村観光事業は周辺村に経済的にも貢献している。ただし，ロングハウス事業の乱立，AK，MJ兄弟の仲違いなどについても周辺他村の村人はよく知っていて，両村の農村観光事業が純粋なコミュニティ開発になりえていないと理解されている。

このようにティナンゴール村，ババンガゾ村の成功が周辺地域に影響を与

えていることは明らかである。クダット郡庁長官もロングス地域の開発を民族文化を中心にした農村観光で進めたいと明言している。ロングハウス農村観光の一定の成功のほか、ティナンゴール村の村人が子供に教育を受けさせ職に就かせることで生活を豊かにしていったことも周辺の村人にはよく知られている。これによりほかの村でも教育の重要性が認識された。この意味からもティナンゴール村は周辺のロングス社会のモデルになっている。

第5節 地域振興の制度構築への含意

ここまでマレーシアのサバ州の一地域での農村観光の展開というきわめてミクロの事例をみてきた。最後にこの一事例からうかがえる地域振興の制度構築への含意と住民の主体性について考察する。

1. 地域振興のための制度構築

前述したように4つのロングハウスによる農村観光事業では、さまざまな経緯を経て村人自身がそれぞれ違った事業管理制度を作り上げている。4つの農村観光事業とも当初は「コミュニティ事業」として開始された。この理由として、漠然とコミュニティ開発を望んでいた、仲間と始めることでリスクを分散したかった、コミュニティ開発とすることで政府など外部の支援を得やすくしたかった、皆でやるほうが楽しそうだった、などが考えられる。しかし、今日まで何とか経済的な利益を挙げているババンガゾ村の2事業では、時を経るに従ってAK氏、MJ氏というそれぞれのリーダーがマネジメントに大きな役割を果たすかたちに落ち着いてきている。コミュニティ開発として始められ多少とはいえ政府からの支援も受けている事業ということもあり、この過程では関係する村人の間でさまざまな軋轢や葛藤があったようである。たとえば、MJ氏は独断的な管理の仕方を「彼はロングスではな

い」と非難され一時村を離れなければならない時期もあった。一方、MJ氏やAK氏のような強力なリーダーを持たずにコミュニティ事業として村落開発委員会を中心に農村観光事業を進めようとしたティナンゴール村の2事業は、今のところ、ほとんど成果を挙げていない。ここにはロングハウスによる農村観光事業を通じて村人が作り上げた2つの異なった地域開発のあり方をみることができる。

現在まで続いているババンガゾ村の2つの事業、行き詰まっているティナンゴール村の2つの事業を比較すると、経済活動をコミュニティ開発として成功に導くことの難しさがうかがえる。成功2事業では、内部に軋轢を生じながらもリーダーを決め、そのリーダーがビジネス感覚で事業を取り仕切ることで参加する村人の利益を確保している。一方、ティナンゴール村の2事業はコミュニティ事業のまま責任が明確化されず、ほとんど経済的には意味がないかたちにとどまっている。これは、コミュニティ開発であっても経済活動には強力なリーダーシップが必要であることを示唆しているように思われる。特に観光業者との折衝など一般の村人が経験したことがない事柄に関しては、コミュニティ開発という集団の無責任に陥るよりも能力のある代表に責任を委任するような措置が必要なのであろう。

ババンガゾ村、ティナンゴール村の伝統的なロングハウスによる農村観光事業は、当初から市場、しかも外国人観光客という海外の市場を目指して始められた。1990年当時村で行われていた青年海外協力隊事業では、野菜栽培、家畜飼育など地域の市場を意識し村人の当時の生活から容易に類推できる事業以外行わず、村人から農村観光が提案された折にも現実性が感じられず真剣に検討されることはほとんどなかった。しかし、村人は自分達が慣れ親しんできたロングハウスの再建というかたちで、海外からの観光客を視野に入れた農村観光事業を実現した。前述のようにルングス社会の開発は1960年代からの西洋からに布教団によって始められ、その過程でキリスト教化することで多くの伝統文化が失われつつあった。現在では同じ村人がロングハウスを再建し、西洋をはじめとする外国人観光客を受け入れることで、経済的な

便益だけでなく伝統文化を復活させ自らの誇りを回復しつつある。ここにはグローバル化する観光市場に自分達の伝統文化や地域資源を使って対応した村人の姿がみて取れる。今のところ、集客は州都の観光業者に頼っているが、最近では大学やNGOの環境・教育活動との連携も模索されており、発展途上国の一村落が自分達なりの方法で市場に対応し制度を作りつつある小規模で原初的な例であると思われる。

2. 住民の主体性

ババンガゾ村、ティナンゴール村のロングハウス建設、農村観光事業は住民主導で始まった。サバ観光公社との多少の相談はあったが、政府の開発担当者やコンサルタントが設計図や事業計画を書いた事業ではない。聞き取りの結果、サバ観光公社を含む政府の関係職員は村人が行う事業内容をほとんど把握していないことも明らかになった。MB氏のロングハウス建設支援にNGOが最初からコミットしていた例を除けば、3つのロングハウスは財政的にも村人の独力で行われ、材料はほとんど周辺の森から確保し、建設作業は村人の無償労働で行われた。事後に観光公社や州議会議員から財政的な支援を得たケースもあったが、これも事業開始前に約束されたものではない。このように村人主導でロングハウスを建設できたのは、ロングハウスの建設が村人の日常的な暮らしの延長であり、新しい技術や資材をほとんど必要としなかったからであろう。ロングハウスは万が一観光事業に利用できなくても住居、作業小屋として利用可能である。最悪の場合、解体してその資材を家畜小屋等の別の目的に再利用することもできる。また、ロングハウスを建設してしまえばあとは観光客を待つだけで、もともと自給自足的な焼畑農業を生業として暮らしを組み立てている村人にとっては特別なコストはかかっていない。この意味では、伝統的なロングハウスによる農村観光は村人にとってリスクの少ない事業であったと考えられる。日常の延長であり、リスクやコストが最小限であったがゆえに、村人は自分達の裁量のなかでロングハ

ウスによる農村観光を始めることが可能であった。マレーシアやサバ州の観光政策やエコツーリズム戦略に則って、事業が検討され方向が決められたわけではない。

一方、行政はマレーシアの観光振興、一村一品事業、後進地域であるクダット郡の地域振興という大きな枠のなかでロングハウスによる農村観光事業を捉え、可能な範囲で村人主導の事業を支援している。支援政策には一定の手順や規定があるのだが、村に足がかりを持たないマレーシアの地方行政は、村人の言うがままに支援を与えているのが実態である。ただし、支援の内容は事業を丸抱えで支えるものではなく、農村観光のためのトイレや水道の建設など側面的で事後的な支援であり、村人が支援そのものを目的に必要な事業を始めるようなかたちにはなっていない。村人は伝統的なロングハウスの再建による農村観光を実現するため、政府の支援を自分達の都合のいいように利用している。前述のように郡庁や観光公社は、ティナンゴール村やババンガゾ村のルングス文化を農村観光ひいては地域振興の中心にしようと企図している。しかし、住民の側はそのような政策意図に頓着することなく自らの意向で政府の支援を資源として利用し、コミュニティ開発と銘打ちながらそれぞれの利益が確保できる事業形態を選択している。

ここに示した農村観光の事例は、政府や外部の支援組織が地域に決定を委ねることで、事業の成功と住民の能力向上を実現する地域振興策を実行しうることを示している。ただし、ティナンゴール村、ババンガゾ村の農村観光事業に対する政府の支援内容は必ずしも一般の村人に広く知られているわけではなく、村人間に無用の軋轢、疑心暗鬼、嫉妬を生み出しているのも事実である。リーダーへの権限の集中などを含めた決定を住民に委ねた事業を地域社会の一体性や調和を損なわない振興策にしていくためには、外部からの支援内容などが広く一般の住民に行きわたる情報公開の仕組み作りが必要である。

おわりに

ティナンゴール村、ババンガゾ村は1980年代に筆者が青年海外協力隊員として赴任していた村である。今回取り上げた伝統的なロングハウスによる農村観光事業を進めている村人の多くは、当時一緒に村落開発プロジェクトを行った人達である。以前は焼畑以外に生活の糧を持たなかった村人達が外国人観光客を迎え入れ、州都の観光業者と対等に交渉する姿は、彼らの社会的な能力が格段に向上していることを物語っていた。青年海外協力隊の事業がこれに貢献したと考えたいところだが、必ずしもそうではないようである¹⁶⁾。

当時の主要なカウンターパートのひとりであり、現在は農村観光事業に関わり UNDP/PACOS のグマントン山の水源林保全プロジェクトを取り仕切っている村の女性によれば、UNDP や PACOS からいわれることは当時青年海外協力隊にいわれたこととほとんど同じだそうである。ただし、その大部分を隊員が取り仕切った青年海外協力隊事業と違って、今回のプロジェクトでは個々の事業の申請書作成から準備、資材調達や実施、会計処理、報告書作成まですべて自分達でやらなければならないととても大変だそうである。一方、これらを自分達でやるのが「とても勉強になり自信を持てるようになった」と語っていた。彼女の協力隊事業と UNDP/PACOS プロジェクトの相違に関する感想、ティナンゴール、ババンガゾ村において住民主体で展開された農村観光事業の事例は、外部者が支援の枠組みを示し、多少問題があってもその計画や実施については当事者に任せ、彼らなりの地域振興を促すことで、住民に合った事業の選択と成功、ひいては住民の能力向上を実現する可能性を示唆している。

[注] _____

- (1) ティナンゴール村、ババンガゾ村のロングハウスによる農村観光については、以下のサイトを参照。<http://home.att.ne.jp/yellow/ajiken/index.html> (2008

年10月末アクセス)。

- (2) マレーシア、特にサバの地方行政の中心は郡庁 (District Office) である。
- (3) バーセル布教団 (Basel Mission) はドイツ、スイス国境のプロテスタント地域からボルネオ島に派遣された布教団であるが、布教以外にもさまざまな開発事業を行った。
- (4) ルングスの民族的アイデンティティについては Appel [1994]
- (5) ルングスの民族宗教は、カダザン・ドゥスのそれと同じく稲の神様ボンバルズンを信仰の中心とする。これについては下元 [1984]。
- (6) 布教団の入村前後のティナンゴール村および周辺のルングス社会の生活についてのビデオが布教団資料から最近みつかり、多くの村にそのコピーが回っている。
- (7) サバ統一党 (PBS) はサバ初のキリスト教政党。党首はカダザン・ドゥスのリーダーで非イスラム的なサバの独自性を強調した。この結果、PBSは時のマハティール・マレーシア連邦政権と対立し、サバ州は連邦政府からの開発支援を受けられず1980年代はサバ州住民にとって困難な時期であった。
- (8) ティナンゴール村での青年海外協力隊事業の展開については、佐藤編 [1994: 第2章] 参照。
- (9) 2007年の調査では、村内の車が47台、仕事を持つ人がいる世帯は68軒に増加していた。
- (10) ルングス社会から最初に大学に進学したのはティナンゴール村人で、1992年のことであった。
- (11) PACOS は Partnership of Community Organizations の略称で1987年に設立されたサバ州では最も古く信頼の高い NGO で JICA や JBIC の調査も受託している。また、UNDP などの援助プロジェクトを村で実施する手助けもしている。ティナンゴール村、ババンガゾ村では、幼稚園の運営支援、グマントン山の流域管理・森林保全、ロングハウスによる農村観光事業を支援している。PACOS の幼稚園では民族文化なども教えて地域の伝統文化の保存を図っている。PACOS のホームページは以下の通り。<http://www.sabah.net.my/PACOS/> (2008年10月末アクセス)。
- (12) 2007年5月の換算レートは1リンギットが35.7円である。
- (13) マレーシアの一村一品運動は連邦政府と州政府の2系統で実施されている。州政府の一村一品運動は1995年から継続して実施されていて、年間予算は約1000万円で毎年10カ村程度を選んで生姜、とうもろこし、養蜂、手工芸品など村の特産品への支援を行っている。
- (14) これらのルングス社会のロングハウスに関しては下元 [1984]。
- (15) このプロジェクトは EC-UNDP Small Grants Program for Operation to Promote Tropical Forests の一部である。プロジェクト名は、Conservation and Manage-

ment of Natural Resources at the Bukit Gumantong Community Water Catchment (MAL/MOA/06-019)。以下のページにプロジェクト概要が掲載されている。
<http://www.sgppft.org/projects.asp?PageID=303>

- (16) 青年海外協力隊事業のティナンゴール村へのインパクトについては、西川芳昭・吉田栄一編「地域振興の制度構築に関する予備的調査」調査研究報告書 アジア経済研究所（2007年、第4章）を参照。

〔参考文献〕

〈日本語文献〉

- 上東輝夫 [1999] 『東マレーシア概説——サバ・サラワク・ラブアン——』 同文社。
恩田守雄 [2002] 『グローバル時代の地域づくり』 学文社。
佐藤寛編 [1994] 『援助の社会的影響』 アジア経済研究所。
下元豊 [1984] 『ルングス族の四季——サバの焼畑稲作民——』 未来社。
駄田井正・西川芳昭編 [2003] 『グリーンツーリズム——文化経済学からのアプローチ——』 創成社。
守友裕一 [1991] 『内発的発展の道——まちづくりむらづくりの理論と実践——』 農文協。

〈マレー語文献〉

- Jabatan Perdana Menteri [首相府] [2006] “Arahan Pelaksanaan Program Satu Daerah Satu Industri” [一村一品プログラム実施ガイドライン], Kuala Lumpur.

〈英語文献〉

- Appel, G. N. [1994] *The Rungus Dusun*, in Victor T. King ed., *World Within: The Ethnic Group of Borneo*, Kuala Lumpur: S. Abdul Majeed & Co., pp. 185-221.
Schulze, Heiko and Suriani Suratman [1999] *Villagers in Transition: Case Studies from Sabah*, Kota Kinabalu: University of Malaysia.
State Government of Sabah [2007] *Tourism Area Concept Plans for Kudat, Kota Marudu and Pitas*, Kota Kinabalu.
Wong, Winnie and Jenny Liaw [1991] “Touristic Assets in the Kudat and Interior Region,” Discussion Paper No. 1, Kota Kinabalu: Institute for Development Studies (Sabah).

